横浜清風高等学校創立100周年

横浜に吹く仏教主義の清い風

神奈川県内の真言宗寺院が共同で経営する㈻横浜清風学園・横浜清風高等学校（横浜市保土ヶ谷区岩井町）が、創立100周年を迎えた。世界有数の国際都市・横浜で弘法大師のみ教えに基づく仏教主義教育の清い風を吹かせて1世紀。次代を担う青少年の心に「智慧」と「慈悲」を育む建学の精神は、グローバル化が急速に進んでいく現代世界にあって一層その輝きを増している。藤井義章学園理事長は関東大震災と同年となる大正12年（1923）の開校以来の歴史を振り返り、「決して順風満帆ではなかった」と述懐。幾多の苦難や難題を克服しながら学園を維持・継承してきた先人に感謝し、「建学の精神を教職員一同が再確認して次の100年に向けて邁進いたす所存」と力強く表明した。

祝賀会に400人集う

記念祝賀会が11月7日午後にみなとみらいの横浜ロイヤルパークホテルで開かれ、約400人が出席した。吹奏楽部の生徒約40人がパワフルな歓迎演奏をし、優美な装束の生徒代表6人が華麗な散華の舞を披露。創立百周年実行委員会の眞田有快委員長（横浜市磯子区・金蔵院）が開式を高らかに宣した。

藤井理事長（横浜市南区・増徳院）は100年前の苦難に言及。「本校は4月に発足し、9月に関東大震災に遭った。横浜の中心部は壊滅状態に陥ったが、本校は辛うじて倒壊と火災を免れた」と振り返り、「設立当初、寺方は経営に参画していなかった。真言宗の檀信徒が私財を提供し、わずか数十名でスタートした。その後、真言宗寺院の共同経営に変わり、現在に至っている」と述べた。

さらに「大震災の後も戦争が続いた」と語り、苦境を乗り越えてきた先人の努力に感謝。「功の成るは成る日に成るにあらず」（蘇老泉）を引用し、「創立100周年を今日迎えたのは、先人からの不断の積み重ねがあるから。学校が栄えるかどうかは、そこに携わる人が思いやりや優しさを持って人としての道を歩んでいるかどうかで決まる」と強調。伝統を継承し発展させる決意を示した。

長谷部真道・高野山真言宗管長（総本山金剛峯寺座主）が、「弘法大師ご誕生1250年」と同年に100周年を迎えたことを祝福。震災と戦禍の「どん底から這い上がってきた」と校史を繙き、分断と対立に傾く世界情勢を憂慮した上で、「平和を守るために国際協力がますます必要になってくる。本校で学ぶ若者が自分自身の個性とキャリアを見つけ、未来に向かって羽ばたいていけるように」と祈念した。

神奈川県福祉子どもみらい局の太田久美子部長が黒岩祐治知事のメッセージを代読。同校が推進する「社会に貢献する人材の育成」に期待した。県教育委員会の花田忠雄教育長は、「真の生きる力を育む教育活動」を称賛。県私立中学高校協会の工藤誠一理事長は「弘法大師が開いた綜藝種智院の伝統を引き継いでいる」ことの現代的な意義を熱っぽく語った。

高野山真言宗の宗門校を経営する㈻高野山学園の理事長でもある今川泰伸宗務総長は、同じ真言宗系学園として「六波羅蜜の実践を教育方針とする」同校の姿勢に共感。世界平和の祈りを込めて乾杯の発声を行った。

同窓会の安田節子会長は、「希望に満ちた（生徒）時代」を回想。「卒業してから母校の教員になり、長く続けることができた。学園は私の人生そのもの」と胸中を明かした。

小高い丘の上にある本校舎。毎年、多くの若者が夢を抱いてここから飛翔している

優美な装束の生徒代表6人が華麗な散華の舞を披露

吹奏楽部の約40人がパワフルな歓迎演奏

100周年記念ソングを活き活きと歌う生徒たちの映像

藤井義章理事長に聞く

祝賀会で挨拶する藤井理事長

正しく生きていける人に

校長をはじめ教職員の努力や保護者の協力もあって、生徒の学力が上がり進学率も上昇している。通常の授業に加え、学習の習熟度に応じて小人数や個別で一人ひとりに対応し、きめの細かい指導をしてきた成果だと思っている。「入学した時の学力より卒業した時のレベルの方が高い」と喜んでくださる保護者も多い。何よりも生徒本人が頑張った成果だが、私たちはその子が持っている能力を引き出す手伝いを全力でさせていただいている。

だが、進学校としての地位向上だけを目指しているわけではない。建学の精神に則り、正しく判断して正しく生きていける人を育てる。その教育方針は、100年前と少しも変わっていない。

オリエンテーションの時、新入生に仏教で一番大事なことは自分の頭でよく考えることですよ」と話している。人生の岐路に立った際に正しく結論を出し、行動できる自分を作ってほしい。そのためには、普段から正しい生活をおくっていないといけない。そこで、六波羅蜜の実践が出てくる。

さらに上の目標へ

少子化で厳しい状況にあるが、理事長としては本校を現在と同じ規模で存続させることが重要だと考えている。今、3学年合計で約1400人の生徒が在籍しており、マックスの状態。しかしこのまま何もしなければ、減少するのは目に見えている。現状を維持するには、上の目標に向かって改革していかないといけない。単なる維持では後退に繋がってしまう。

本校はJR保土ヶ谷駅から近い立地で湘南新宿ラインなども走っており、比較的遠方からも多くの生徒が来る。創立90周年事業で、校舎と設備を刷新した効果も大きい。

当時の川口益生理事長が発展のレールを敷いてくれた。私は100周年までの10年、その路線を引き継がせてもらったと感謝している。今後一層、充実させていきたい。

植野法稔校長インタビュー

決意を表明する植野校長

自己肯定感を持たせる教育

令和2年に校長に就任した途端に、コロナ禍で2カ月の休校になった。何をどうしたらいいのか…。幸い本校ではコロナ禍前から2年生には授業用にタブレットを持たせており、結果としてオンライン授業にも対応できる素地を作っていた。1年生にもiPad、3年生には課題を郵送し、手探りで進めていった。

オンラインを通して、教育におけるアナログの大事さに改めて気付いた。面と向かって話し、勉強もクラブ活動も一緒に行う。その中で、人間としての大事な部分も形成される。感染防止を徹底した上で、早く対面活動を再開するように心がけた。

最も重視している教育方針は、生徒一人ひとりに自己肯定感を持たせること。10代後半は、将来への不安や友だちとの比較などで「自分には力がない」と思い込み、心が不安定になりやすい。この人生の重要な時期に、いかに多様性を育むか。自己肯定感と多様性は一体だからだ。

自己肯定感を持つには、基本的な生活習慣を身に付けることが必要だ。生活が安定すると意識も安定する。そうした日々の中で、「あなたには力があるんだよ」と伝えていく。自己肯定感を持てた生徒は、「人生の目標は一つではない。いくつもあっていいんだ」と気づき、自分の尊さと共に他者の尊さも自覚していくようになる。

校則の改訂は合意で

最近、制服のバリエーションを増やした。例えば女子はスカートかスラックスか、ネクタイかリボンか、好きな方を選べるようにした。夏場は男女共にポロシャツでもよく、選択の幅を広げた。

校則の改訂も、生徒会が提案する。「これは何のための規則か」「生徒たちで話し合い、「改訂に合理性や論理性はあるのか」を生徒たちに判断させる。そうすれば生徒たちは「自分たちで決めたルールなんだからちゃんと守ろうよ」と自主自立の心を持つようになる。

もちろん、校則を改めるには学校側との「合意」が必要だ。許可ではなく合意。校則の変更は、学校をさらに良くしていくための責任が伴う。生徒たちがこうしたことを学ぶ中で、自治の気風も育つと期待している。

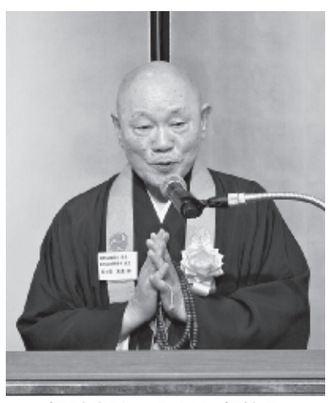
私には公立の小中学校で校長を務めた経験があり、その子が高校生になるまでの義務教育9年間でどんな指導を受けてきたのかある程度理解している。小中で培ってきた可能性を本校で高めていってほしいと願っている。

弘法大師の心を受け継ぐ

県民ホールで校内式典
「学校の一体感高まる」

世界平和の祈りを込めて乾杯

今川宗務総長


祝辞を述べる長谷部管長

全教職員が盛大な見送り

開式を宣する眞田委員長

創立100周年を祝う校内の記念式典が9月29日、横浜市中区の神奈川県民ホールで開催された。保護者も参加し、生徒たちの躍動的なパフォーマンスを見守った。

藤井理事長が第1部で百周年スローガン「Go to the Next Stage with us」を挙げ開式挨拶。第2部で箱根駅伝でお馴染みの青山学院大学・原晋監督が講演した。

第3部は生徒活動の発表会で、ダンス部とフォークソング部、バトン部と吹奏楽部など運動部と文化部が垣根を越えてコラボレーション。生徒たちが自主的に考えた演出で、生徒同士のコミュニケーションも深まった。

皆で校歌斉唱

最後は全校生徒で校歌を熱唱。生徒会の淺賀祐星会長が「先輩たちから学んできた人を思いやる気持ちを、僕たちもまた次へと繋いでいこう」と語りかけ、「生徒会長として皆が過ごしやすい学校を目指し、これからも頑張っていく」と表明した。

藤井理事長は、「芸達者な生徒が多く、盛り上がった。生徒同士でも〇〇にこんな能力があったのか！」と互いに認め合う場面も見られ、学校の一体感が高まった」と感想。「あの広い県民ホールの舞台を活き活きと躍動した生徒たちの姿に感動した」と話した。

阿字観と写経で卒業
希望に満ちて巣立つ

阿字観で精神統一

真言宗を開いた弘法大師のみ教えを建学の理念とし、仏教の智慧と慈悲を教育方針・生活目標としている横浜清風高校。毎週月曜日の朝の勤行（朝礼）をはじめ、花まつりや青葉まつりなど1年間に7回の仏教行事があり、新入生は5月の高野山研修旅行で弘法大師の精神を体感する。そして3年生は卒業式を控えた2月に阿字観（密教瞑想法）・写経実修を行い、高校生活を締めくくる。

私語もなく静寂の中で写経と阿字観を行じ、高校3年間を振り返りながら現在の自分を見つめ直す貴重な時間。実修を終えた生徒たちの表情は凛々しく、希望に満ちた心で母校を巣立っていく。

生徒の大半は一般家庭の出身。同校では、生徒に真言宗の教義というより、〝仏教ではこういう時にはこう考える〟という智慧を伝えているという。高校生活の中で心に染み込んだ智慧は慈悲の心も育んでいく。

智慧と慈悲を身に付けた誠実な青少年を育成するという同校の教育理念。生徒たちは「毎日を一生懸命に生きることが修行」という生活の指針を全身で受け止め、日々勉学やスポーツ、文化活動に励んでいる。

写経に集中する生徒たち

横浜清風高校の歩み

JR横須賀線の保土ヶ谷駅から徒歩8分。横浜清風高校のキャンパスは、なだらかな丘の上にある。柔らかな陽光が降り注ぐ校内からは、世界有数の港町・横浜の絶景を一望。彼方には霊峰・富士の壮麗な姿を遠望することもできる。

その歴史は大正12年、横浜市南区大岡に創立された横浜家政女学校に始まる。昭和2年に明倫高等女学校となり、同4年に神奈川県内の真言宗寺院による共同経営に移管。同22年、学制改革により明倫高等学校となり、平成13年に横浜清風高等学校に改称。一部共学となり、同17年には全校男女共学制に移行した。

同23年、新校舎I期工事完了（アリーナ・南館）。同24年8月にはII期工事（本館）、12月にはグラウンド整備が完了し、新校舎が竣功。弘法大師が約1200年前に開いた日本初の私立学校「綜藝種智院」の建学の精神「仏教の理想とする人間完成」を受け継ぐ私学として、新しい時代に対応する体制を整えた。

教育における伝統と革新の両立。同校では智慧と慈悲を説く仏教精神により誠実で明るく健康な青少年の育成を教育目標に掲げ、仏教の最重要徳目である六波羅蜜の現代的実践を学園生活の指針としている。

布施＝思いやりの心を持って人に接しよう

持戒＝ルールを守り自制の心を持とう

忍辱＝忍耐の心を持って他人に対して寛容であろう

精進＝自分の目標を定めベストを尽くそう

禅定＝自分を振り返る平静な心を養おう

智慧＝新鮮な心で知恵を磨こう

最新の設備を備えたアリーナ

人工芝のグラウンドも整備。同校ではスポーツも盛んだ

安心して任せられる

PTA役員の一人は、「学校がきれいで、先生方が教育熱心」と同校の魅力を強調。「〝今の学力ではムリ〟と言われている大学にも、受験までにどう勉強を進めたらいいのか細かく指導してくれ、合格に導いてくれる。そういう話を以前から多く聞いていた」と話し、「息子は今2年生。1学期につき1回、三者面談がある。各学期の終業式の前日には保護者会もあり、先生がクラスの様子をプロジェクターなどを使って報告してくださる。これなら安心して子どもを任せられる。仏教を建学の精神としているので、心の落ち着きや礼儀正しさも身に付く」と満足そうに語った。

令和5年度の花まつりの様子。6月には青葉まつり、7月には盂蘭盆会、12月には成道会、2月には涅槃会を営む。生徒たちは仏教行事への参加を通して、礼儀正しさなど落ち着きを身に付けていく

六波羅蜜を生活指針に